

# 噂の断片から隠された事実を探る

——1830年代初頭のバルザック短編小説における噂の役割——

博 多 かおる

## 序

「噂」はあらゆる時代の社会に見られる現象である。古代ギリシャ・ローマ時代、出所が明らかでない様々な知らせを伝えるファーマ (Fama) はゼウスの使者あるいは娘とみなされ、ウェルギリウスやオヴィディウスのような詩人たちは、噂に怪物あるいは巨人のような形象を与えつつ、口伝えの情報伝播の驚異を描いた。時は移り、フランス 19 世紀には、もはや噂の中に神聖なお告げを聞く者は少ない。特にフランス社会が前世紀末に経験した重要な社会変革の中で、噂を担う者の姿は決定的に変化したと言えるだろう。ハーバーマスによれば、18 世紀には宮廷の空間に対立するかたちで「公共空間」が生まれ、印刷物や新聞が知識人たちに大衆世論をかき立てる手段と場を提供した<sup>(1)</sup>。またアルレット・ファルジュが語っているように、通りに流れた多くの奇妙な噂は民衆の不満を表現し、政治の腐敗を間接的に告発していた<sup>(2)</sup>。こうしてファーマの姿は民衆の後ろに隠れたのである。そしてバルザック小説が描く噂の中にも、しばしば民衆蜂起のどよめきの響きが残ることとなった<sup>(3)</sup>。

19 世紀のロマン派的な文脈において、噂や世評は、自我の探求・芸術的理想の追求を妨害する俗世間の雑音と見なされることが多い。バルザックにもこうした考えは見られなくはないが、噂はあらゆる社会階層において個人の生活を脅かす力として捉えられている。他方、1840 年頃から流行した新聞小説、アレクサンドル・デュマの『三銃士』、『モンテ・クリスト伯』のような小説に

において、噂は出所が明らかでない情報として活用され、予期せぬ展開を生み出す要素の一つとなる。「はやっているのは小説の投機ばかりです。(中略)新聞小説が必要とされて、我々の書く散文の値段は上がるでしょう」<sup>(4)</sup>と愛人ハンスカ夫人に書き送ったバルザックは新聞小説の誕生に貢献し<sup>(5)</sup>、新聞小説家たちの活動の経済的効果も認めていたかもしれないが<sup>(6)</sup>、必ずしも新聞という媒体に信頼を寄せていたわけではなかった。印刷物一般についても、『カトリース・ド・メディシス』において彼は書いている。「印刷物がどれだけ、身分の高い人々への羨望の念をかき立て、偉大な歴史的事実の意味をねじ曲げてしまう民衆の冗談を定着させてしまったか、誰も気づいていない<sup>(7)</sup>」。フランス社会の書記たろうという望んだバルザックは、印刷物や大衆の噂話の中に埋もれて見えなくなってしまった過去の事実を蘇らせ、同時代の社会の実態を描き残そうという野心を抱き続けた。

ただし、バルザック小説の中で噂 (*rumeur*)、風説 (*bruit*) と呼ばれるものは、まったく無意味な架空の物語を語るわけではない。例えば噂は、社会における各個人、各党派の利害を表現することがある。時には噂が、人間の根源的な恐怖を語ることもある。また他の作家にはあまり見られないことだが、バルザック作品における噂は、過去の社会混乱の記憶をたぐり寄せ、そこから生じた人々の素性の不透明さ、財産の出所の怪しさといった問題を問い続ける。噂の言葉は、現在において見えているがままの事物の姿を、再び検討の対象とする契機をはらんでいるのである。ここでは紙面の関係上、こうした問題の全体を論じることは残念ながらできない。したがって今回は、バルザック小説がその推理のプロセス、および物事や人物の姿を再構築する方法を確立してゆくにあたって、“疑問を投げかける”という噂の機能をいかに活用し得たか探ってみたい。

## I. 『徴募兵』 *Le Réquisitionnaire*

バルザックがやっと小説家として世に知られるようになって間もない 1830

年代初頭に書かれた短編小説には、しばしばある共通した仕組みが見られ、そこでは噂は作品冒頭から現れる。まず『徴募兵』（1831）<sup>(8)</sup>について見てみよう。1793年、恐怖政治の始まりを目前にしたフランス北部ノルマンディーはカラントンの町で、ド・デー伯爵未亡人が突然、理由も明らかにしないまま、常連客をもてなす集まりを中止したことについて、噂が広まり始める。『人間喜劇』の多くの作品で語り手は、同じことの繰り返しである田舎町の日常を少しでも乱すような出来事があれば噂が生まれることを指摘している。しかし、ここでは危機的な歴史的状況のために、ド・デー夫人を断頭台へ導くような秘密がこの小さな事件の陰に隠されているのではないかと人々は恐れ、噂はますます大きくなる。

「田舎では人々の暮らしはまる見えである<sup>(9)</sup>」という、バルザックが他の作品でも強調している田舎町的生活条件をもとに、人々はド・デー夫人の家で起きていることを細かに観察し始める。「女も男も、年寄りも少女も、さまざまな推測の中をさまよい始めた。誰もが秘密を垣間見たように思い、その秘密が皆の想像を捉えて離さなかった<sup>(10)</sup>」。「秘密 (secret)」という言葉が示すように、噂する人々は、日常生活の表面下に未知の真相が隠されていると仮定する。また「推測 (conjecture)」という言葉語り手が用い、この短編小説で謎めいた出来事を解釈する仕事を始めるのが噂の担い手たちであることを強調している点に注目したい<sup>(11)</sup>。さらに、噂する者たちが普段から観察の対象の身近に生活していることを利用し、語り手が彼らに様々な異常の徴候を発見する役割を持たせていることは、有名な「野うさぎ」のエピソードを見れば明らかになる。このエピソードとは、ド・デー夫人の料理女が町の市場で野兎を買ったのをきっかけとして、夫人が密かに誰かの訪問を待っているという噂が町を駆け巡る、というものだ。カラントンの住民たちは、普段からこの貴族の女性が猟肉を食べないことを知っていたのである。

ところが作者は、噂する人々がまっすぐに真実にたどり着くような筋書きを用意してはいない。例えばド・デー夫人が人の訪問を受けないのは、病気と言っても「不治の病」、つまり恋の病にかかっているからだと推測する人物の言

葉を語り手が引用する。つまり間違った結論に我々を導きかねないような指標を噂の中に散りばめ、いったん正しい推測の方向を見えなくした後に、事実の暴露につながる調査の模様を描き始めるのである。

小説がある謎を解くためには、語り手に直接、隠された事実を語らせることもできる。しかしここでは、後で触れる『コルネリユス卿』と同じく、謎が隠されている場所にある登場人物を送り込み、重要な情報を集めさせるという方法が取られている。ド・デー伯爵夫人の友人たちが心配して送り込んだのは町長の弟であった。フランク・シュエルヴェーゲンが指摘している通り、この卸売り商人（*négociant*＝「交渉する人」）は、「秘密を引き渡すかわりに市長の保護を保証してもらう<sup>(12)</sup>」という交換を伯爵夫人に承諾させるのである。だが彼は「町を駆け巡っている噂<sup>(13)</sup>」の的になっていることをド・デー夫人に告げた上で「夫人が引きこもった本当の理由を教えてください代わりに、危険な中傷から彼女を守る」という、噂に関する交換を受諾させてもいる。この訪問客は直後の場面で、噂の核となった野兎について、生きたまま剥いだ兎の皮が胃の発作に効くのだといった説明を王党派の医師と共にでっちあげ、噂の攻撃をかわすよう試みるだろう。ともあれ、彼の任務は小説にとって成功である。なぜなら男は、デー夫人の息子から来た手紙を読ませてもらい、夫人がこの亡命貴族の帰宅を待っているのだという肝心の事実を知るからである。手紙によれば、王党派によるグランヴィル襲撃に参加し捉えられた息子は、もし逃走できれば三日以内に偽装して母の家に現れるはずであった。小説の語り手は、この発見の内容を読者にも教えるに際して、手紙を要約して伝える方法を取っている。そのため、これまで訪問客の視点を通じて物事が観察されていたにも関わらず、彼の視点を押しつけ、突然語り手の視点が前面に出てくる。男の訪問が、小説にとって極めて重要な情報を含んでいる手紙の内容を読者に知らしめるための口実に過ぎなかったことは、こんな小さなそぶりにも表れていると言えよう。ド・デー夫人が集まりを中止した理由の探索は、この時点で読者にとっては終わることになる。

この小説における二つ目のサスペンスは、ド・デー夫人が息子に会える希望

を密かに抱きつつ、サロンに常連客を迎え、彼らの詮索をかわした直後に訪れる。一人の徴募兵が真夜中にカラントンの町に着き、宿を求める。この若い男性のアイデンティティが問題である。市長ははっきり、ド・デー夫人の息子だと思い、先ほどの交換に基づいて彼を夫人の家にする。夫人もまた、彼を息子と見間違え、彼に抱きつく。しかし突然我に返り、これが見知らぬ若者に過ぎないことに気づくのである。フランク・シュエルヴェーゲンが述べているとおり、初めてこの作品を読む者は、母親と同じように、未知の若者の中に偽装したド・デー夫人の息子を見て、夫人の幻想が消えた時、彼女と同時に誤りを悟るに違いない。もちろん、二度目に読む時、読者は同じ反応を示しはしない。

小説に引用されている噂に関しても同様である。作品を一度目に読む時、雑多な噂のそれぞれが妥当なものかどうか自問しながら読み進んだ読者も、二度目以降の読書では、正誤とは別の次元で、噂に隠された意味を考えたりもするであろう。先に触れた〈ド・デー夫人は恋の病にかかっている〉という噂は表面上まちはがっているが、人に隠さねばならないような絆が、夫人が集まりを中止した理由の根底にあることを、発話者の意図とは別のレベルで示唆している。作者はこんな噂の引用の中にも、真実の淡い反射を滑り込ませているのではないだろうか。

来ない息子を夜の静寂の中で待ちながら、母親は一種のテレパシーによって息子が銃殺されたことを悟り、息絶えるだろう。噂のざわめきは、直感を研ぎすます静けさと対照をなし、噂の言葉と真実の迂回した関係は、魂と魂の直接の交流と対立する。雑音を多く含む噂は、このような対照によって「空間の法則を越えた交感<sup>(14)</sup>」の特権性を浮き彫りする役割をも担っているのである。

## II. 『サラジーヌ』 *Sarrasine*

『サラジーヌ』はランティ家の舞踏会の場面で始まるが、そこで語り手と連れの女性の耳に、邸の豪華さに目を見張る二人の未知の人物の会話が聞こえて来る。

- この家の人たちが、ニュシンゲン氏やゴンドルヴィル氏ほどお金持ちだと思われませんか？
- 何、それじゃあなた、ご存じないのですか<sup>(15)</sup>。

二番目の人物はこの家の財産について、何か重要なことを知っているようである。しかしながら、どれだけ信頼性があるかわからないこの暴露の物語は、すでに中断されなければならない。なぜならこの短編小説は噂には頼らず、別の方法で真実を暴くことを目論んでいるからである。ロラン・バルトは、この作品で「謎 *l'énigme*」がはっきりと定義される前に、舞踏会を彷徨う幽霊のような老人が問題の鍵を握る人物として指し示され、「謎」のテーマがランティ邸の豪華さとの関連で提示されて「強調される *emphatisé*」様を細かに分析している。そしてバルトは「謎」のテーマが再び現れるたびに答えは「はぐらかされ *éludée*」ており、あるいは「中断され *suspendue*」ることも指摘している<sup>(16)</sup>。

この宙ぶりの状態を利用し、語り手はランティ家の財産の由来を問い直す人々の「型 (*type*)」を明らかにしようとする。

私は身を乗り出して、会話している二人の人間が、パリでひたすら「なぜ？どのように？あの人はどこから来たのか？彼らは誰か？何が起きているか？彼女は何をしたのか？」といったことを問題にしている物見高い人種であることを確かめた<sup>(17)</sup>。

名の知れぬ社交界の人々、非常に好奇心の強いパリ人の典型がこのように小説冒頭に現れ、人々の素性や素行を疑問に付す。もっともミッシェル・セールによれば、サロンでおしゃべりをしている人々は「おしゃべり *causerie*」という言葉の語源からして、この短編が繰り広げるような詮索のプロセスの発端を作るよう、運命づけられているらしい。セールは「原因 *cause*」という言葉を内包する「おしゃべりする *causer*」と「弾劾する、非難する *accuser*」は同

じ行為であると述べ、噂好きの人々は、舞踏会で他人を中傷しながら訴訟事件を予審に付しているのだ、と述べる<sup>(18)</sup>。

考えてみれば、バルザックは初期小説『アネットと罪人』(1824)以来、人々のおしゃべり (*causerie*) が物事の理由 (*cause*) を探る役割を持ちうることを示してきた。『アネットと罪人』では、デュランタルの城を買い取り、城主として「デュランタル氏」と名乗った主人公の本当の名と財産の出所を噂好きの村人たちが詮索し、ついには、彼が海賊として罪を重ねた男であるという事実が暴かれることになる。ただし『サラジヌ』では『徴募兵』と同じく、噂による詮索に限界があることが、物語の構造の鍵を握っている。ランティ家に時折現れる謎の老人について、社交界の人々は様々な憶測をするが、決定的な情報をつかむことができない。

あれこれと詮索してみても、家族の者たちの慎重さのせいで無駄に終わったため、こんなに用心深く守られている秘密を、もう誰も探ろうとしなくなった。育ちの良い密偵たち、野次馬たち、政治家たちは皆、ついに、この謎を解くのを諦めてしまった<sup>(19)</sup>。

こうしてバルトが言うように、謎は「塞きとめ」られ「立ち往生」(*blo-cage*)<sup>(20)</sup>ということになる。もっとも『徴募兵』においてと同様、真実を探る目印となるいくつかの要素を作者が噂の言葉の中に滑り込ませていることを、読者は何度目かの読書において気づくこともあるだろう。社交界の人々は、老人に漂う定義しがたい曖昧さ、何らかの罪の疑いなどに言及している。それらの言葉は発話者の意図とは関係なく、小説の読者に対して、老人の性的なアイデンティティの曖昧さ、それを見誤った者が過去に死によって罰せられた事実などを仄めかしているとも考えられるのである。しかしこのような要素は、それだけでは、老人の素性やランティ家の財産の由来を暴くには不十分である。

噂によって作品に導入された疑いを明らかにするために作者が取る方法は

様々だ。『徴募兵』では、噂する人々の中から選ばれた特定の登場人物が、一通の手紙を読むことで謎の解明に立ち会う。そして手紙の内容は語り手の要約というかたちで読者に伝えられ、探偵の役割をした登場人物と同時に、読者も真実を知ることを見た。『サラジヌ』は、秘密の暴露が、ひたすら一人の人物の語りのパフォーマンスに依存している型の作品の一つである。隠された事実を語る人物は、この短編では小説全体の語り手と一致する。彼は冒頭で連れ添っていた女性、ロシュフィード夫人にせがまれて、ランティ家の財産の由来を明かす物語を、翌日、彼女の家へ語りに行くのである。外側を縁取る物語の中に埋め込まれたもう一つの物語によって、その直接の聞き手であるロシュフィード夫人と同時に『サラジヌ』の読者もまた、驚くべき事実を知るだろう。彫刻家サラジヌが女と間違えて恋し、そのために命を落とすことになった歌手ザンビネッラは、謎の老人その人だったのである。ロシュフィード夫人はこの話を聞いて激しい衝撃を受け、語り手にすげなくする。冒頭で言及された数多くの噂の実体のなさと言われた物語の残酷なまでの具体性の間にある溝とコントラストは、小説読者をも動転させる力を持っている。

### III. 『フィルミアーニ夫人』 *Madame Firmiani*

『フィルミアーニ夫人』（1832）では、小説の途中で謎が解決されることも撤回されることもできなくなって「立ち往生」しており、噂する人々が最後まで真実にたどりつけないことは『サラジヌ』と同じである。ただしここでは、謎を解決するような物語を語り手が誰かに語るわけではない。『徴募兵』のように、一人の登場人物が秘密の鍵を握る者のもとへ調査に行き、ある手紙の内容を知ることによって隠された事実が明らかになる、という構造が取られている。

作品冒頭で引用されているのは、フィルミアーニ夫人についての互いに矛盾する数限りない断片的な噂である。語り手は言う。「社会の中の階級と同じ数だけ、カトリック教の宗派と同じ数だけフィルミアーニ夫人がいたのだ。なん



と恐ろしい考えだろうか。我々は皆、石版画の原板のようなもので、悪口によって数限りない複製がそれをもとに作られるのだ<sup>(21)</sup>。噂の「石版画効果 **effet lithographique**」を述べている興味深い箇所である。このような比喩を用い、噂の多様性を読者に印象づけた上で、作者は視点を次第に絞り、ある具体的なフィルムアーニ夫人像を捉えてゆくことになる。

一種の探偵として作品に視点を貸すのは、トゥール地方に引退している地主のブルボンヌ氏だ。唯一の遺産相続者である甥オクターヴ・デュ・カンが、フィルムアーニ夫人という女性のために父親の財産を処分する羽目に陥り、数学の教師をして生計を立てているという噂を聞いた彼は、パリに上ってフィルムアーニ夫人邸に赴く。噂の迷路に読者を彷徨させた後、作者はブルボンヌ氏を噂の的になっている人物、フィルムアーニ自身夫人に会いにゆかせ、真実のフィルムアーニ夫人はどんな人間か語ってくれるよう懇願させるのだ。このシナリオは不躰で、少々無理があると言えよう。夫人はオクターヴを愛していることは認めるが、噂については答えることなく立ち去る。仕方なくブルボンヌ氏が甥のオクターヴのもとへ行くと、この若者は、実は自分がフィルムアーニ夫人と秘密結婚していることを告げ、彼女から受け取った一通の手紙を朗読する。ド・デー夫人の息子の手紙と異なり、フィルムアーニ夫人の手紙は全文が朗読、引用される。その時、読者は、冒頭から作品を支配していた噂を語る人々の視点と決定的に決別し、秘密の鍵を握る人々の視点から物事を見て、一つのバルザック的な事実を発見することを許される。すなわち『サラジーヌ』の老人の場合とは別の意味で、登場人物（オクターヴ）の財産は汚れていた。父親が不当な方法で他人から奪った財産を、フィルムアーニ夫人の勧めに従って彼は返却したのである。

不正な方法で作られた財産、これは社会の奥底に眠る秘密の中でも、バルザックが歴史家として好んで指摘しようとするものだ。たとえば『禁治産』（1836）で作者がポピノ判事に探らせるのは、ルイ 14 世の時代にプロテスタント商人の一家を騙して先祖が獲得した財産を、デスパール侯爵が犠牲者の子孫に返却している、という隠された事実である。「**restitution**=財産の返却／

いったん葬り去られた過去の再構築』は『人間喜劇』の核を成す話題なのである。『人間喜劇』自体が、フランス社会の動乱の中に葬り去られた、あるいは生き残ったがまさに消えて行こうとしている物事を掘り起こし、書き直し、それらの本当の姿において書き留めようとしているからであろう。しかし **«restitution»** という主題は、噂が頻繁に引き合いに出す 19 世紀社会の神話目録には欠けている。だからこそ作家はさまざまな外的噂を引用した後で「返却」を語って「復元」を行い、自身の歴史家としての慧眼と語りを仕組む能力を、噂する人々の推理力の乏しさと対比しつつ強調することができる。

#### IV. 『コルネリユス卿』 *Maître Cornélius*

『コルネリユス卿』（1832）の冒頭は 1479 年の万聖節の日に設定されており、バルザックにとっては意味深い場所、生まれ故郷トゥールの大聖堂で行われた礼拝を描いている。石の建築と群衆が一体となって呼吸する荘厳な聖堂内部の描写も印象深いが、集まった人々の間に生まれる共感、礼拝後の雑踏の場面などは、同作品で噂や暴動の立役者となる集団を別の角度から捉えていて興味深い。ルイ 11 世の娘マリー・ド・サンヴァリエ夫人に恋した貴族の青年は、この雑踏を利用して彼女を別室に連れ出し、ある計画を語る。彼は、マリーの家に隣接するコルネリユスの家に徒弟として入ってゆく手筈を整えており、そこからマリーの家に忍び込むつもりであった。

ところで、ルイ 11 世の会計係を務めるフランドル出身のコルネリユス卿の家では、最大の用心をもって外からの侵入を防いでいたにも関わらず、しばしば重要な盗みが起こり、弟子入りした若者たちが疑いをかけられて処刑されていた。この事情は、時間を遡って語られる。語り手の解説を聞きながら、読者はトゥールの町の噂がコルネリユスに否定的であることに気づくだろう。住人たちはコルネリユスの家を「悪屋敷 *Malemaison*」と呼び、「高利貸しの前を通った *Vous avez passé devant le Lombard*」という表現は、突然の病気や予期せぬ悲しみ、金銭上の不運などを表すものとされていた。トゥールの人々

はこのような表現を共有することによって、コルネリウスに対する恐れと憎しみを確かめあっていたのである。

本作品でも、噂は真実をかすめはするが、捉えることはできない。例えばコルネリウスの家で起こった盗みについて、噂はこのように判断する。「ある者たちは残酷なコルネリウスは王を真似て、世間と自分の間を恐怖と絞首台で隔てようとしているのだ、彼は盗まれたことなど一度もないのだ、弟子たちの処刑は冷酷な計算によるもので、彼はこうして自分の財産に誰も手を出せないようにしたかったのだ、などと言っていた<sup>(22)</sup>」。作品を一度目に読む者は「彼は盗まれたことなど一度もない」という意見を一つの解釈の可能性として読むだろうが、二度目以降に読むとき、これが正しいことを知っているだろう。またこれと逆に、コルネリウスの財産の消滅や弟子たちの死が、噂が主張するように「冷酷な計算によるもの」でないことも二度目の読書では気づくであろう。これらの出来事は、コルネリウス自身まったく制御できない現象の産物だったのである。

『徴募兵』、『フィルミアーニ夫人』などと同じく『コルネリウス卿』でも、噂を通じてさまざまな憶測が作品の中に提示された後、ある人物が謎の舞台であるコルネリウス邸に入り、盗みについての事実を探る。マリーの家に入居するため、弟子としてコルネリウス邸に忍び込んだジョルジュ・デストゥットヴィルは、真夜中にコルネリウスが歩き回り、訳のわからない言葉をつぶやいているという一つの証拠を目撃するが、次の朝すでに逮捕されてしまうため、一時的な観察者でしかない。（初めて小説を読む者は、作品をさらに読み進んだ時点から振り返ってやっと、彼が発見したこの証拠の意味を理解することができる。）そこで作品は、もっと強力な探偵を問題の場所に送り込む。ルイ 11 世自身である。「あの家をマントのように覆っているルイ 11 世の恐ろしい権力がなければ、民衆はちょっとしたきっかけで悪屋敷を打ち壊してしまっただろう<sup>(23)</sup>」と語り手が述べていることからわかるように、この作品で噂する民衆の力を制御することができるのは、王権と父性の象徴であるルイ 11 世だ。事実の再現 (restitution) を司るのもまた、彼である。王は、人々が眠り

につく前に床に粉を撒いておく。朝になって再び宝が盗まれたことが判明するが、床についた足跡を王が調べた結果、宝庫に立ち寄った足跡はコルネリユスのそれと一致しており、夜警の兵士たちはコルネリユスが夜半、壁沿いに猫のように降りてきたのを目撃したという。コルネリユスは夢遊病にかかっており、財宝への執着のあまり、眠りの中でも宝を探しに行つてどこかに隠していたのである。

本作品では、事実の再構築は読者に対してのみ行われ、トゥールの町の人々は事の真相を知ることがない。以前からコルネリユスの姉を魔女だと噂していた人々は、ルイ 11 世が「悪屋敷」を出たのと彼女の死が一致したため（実際のところ、彼女はコルネリユス自身が盗人だったという知らせに驚いて死んだ）、この姉こそが盗難の犯人であり、秘密裏に処刑されたのだという噂を広める。真実が知れたら民衆は真犯人をただちに殺してしまっただろう。噂が誤った方向に向かったため、自邸に残されたコルネリユスが自分を舞台に起きている夢遊病という現象を見つめ、所有欲が作った自己の暗黒の部分と向かいあう様を描く時間が残される。コルネリユス邸はルイ 11 世が崩御した時に初めて略奪される。小説が財宝の消え去った理由を発見し、処刑された人々の罪をそそぎ、これらの作業を可能にした権力が消え去った時に、民衆の怒りは初めて爆発し、謎の舞台となった場所を根こそぎにするのである。

こうして『コルネリユス卿』では失われた財宝は返却されることがないが（それは「悪屋敷」の破壊者の一人に発見され、シュノンソー城の建設に使われたかもしれないという）、処刑された弟子たちの名誉は少なくとも小説の読者に対して回復され、盗みをめぐる事実は再構築された。この意味で「**restitution**」は実現したわけである。噂を通じて提示された謎の解明は、噂の担い手である民衆の推測が「立ち往生」してそれ以上先に進めないことが示された後、王の権力を呼び出すことによって進められ、人々について、財産について、人間の精神の働きについてのある事実が、小説の読者に対して暴かれたのである。

## 終 わ り に

以上からわかるように『徴募兵』『サラジーン』『フィルミアニ夫人』『コルネリウス卿』では、共通して作品の冒頭に噂が引用され、それはある人物や、ある出来事の隠された面を疑問に付すような内容を持っている。この噂に誘われて謎の解明に向けた調査、あるいは「物語内物語」が始まり、最後に読者は登場人物の一部と共に、見失われていた真実を発見することになる。1830年代初頭においてバルザックは既に、推理のプロセスに連なる一要素として噂を物語の構造の中に取り込み、「現代史の裏面<sup>(24)</sup>」の探求の道具とする方法を確立したと言えよう。以後、彼はこれを応用していくこととなる。

バルザックは創作活動を通じて、実生活では容易にコントロールできない噂というものの力を小説に組み込み、作家が制御できる要素として活用する術を探っていた。19世紀社会で大きな問題となっていた、人々の出自や財産の出所の不透明さに光を当てるために、もともと詮索好きな噂の声をういたのは当然とも考えられよう。様々な罪や不当な投機によって新しい財産や身分を獲得した人々の過去を、噂は詮索する。以後の作品でも、革命期の小麦の値段の高騰に乗じて財産を作ったゴリオ（『ゴリオ爺さん』1835）、城や歴史的建造物を破壊し、それを部分に分解して売り飛ばし財産を成したソーヴィア（『村の司祭』1841）らについて、噂は真実を解明することはできないながら、疑問を導入する役割を担ってゆく。

噂はそれ自体、常に断片的な記憶、断片的な言葉である。多数積み重なっても、やはり噂は断片的なディスクールでありつづける。様々な紋切り型に囚われた噂は、しなやかに視点を移動させながら客観的に観察し、それをもとに論理を組み立ててゆくことができないという意味で、自由でない。ところが小説に組み込まれた時、噂は固定した役割を与えられて何かを構築する仕事に携わるようになると同時に、別種の「自由」を獲得する。噂の言葉は、小説の中で読まれることによって、重層的な意味を持つようになる。それは「現代史の裏

面」を再構築するバルザック小説という建築の中で、発話者個人のアイデンティティが不明確だからこそ、自由に社会の諸側面を反射する言葉となるだろう。噂の中に読者の推理を左右するような道標を散りばめ、作品の読者ともなりうる集団の言葉を小説の内部にこのようなかたちで嵌め込むことによって、バルザック小説は、小説の内部と外部を奇妙なかたちで循環させ、社会の見えない部分がそこで自らを再発見する、奇妙な鏡としての性格を発展させていった。

バルザックの生きている間に、多くの政変によって「現代」と呼べる時代はめまぐるしく移り変わった。特に1830年の七月革命後の世界が「現代」として意識されるに至って、バルザックが噂を通じて暴こうとする「裏面」は変わってゆく。多くの噂の原型を生み出したフランス大革命から帝政にかけての動乱期が遠くなるにつれて、噂が言及するものとバルザック作品が描こうとする現実の関係はどのように変化して行ったのか。広い視野から、後期の作品も射程に入れたうえで、こうした問題を探ることが必要になってくるだろう。

#### 註

- (1) Jürgen Habermas, *L'Espace public*. Traduit de l'allemand par Marc B. de Launay, Payot, 1993, (Hermann Luchterhand Verlag, 1962).
- (2) Arlette Farge, *Dire et mal dire. L'Opinion publique au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Seuil, 1992.
- (3) この点については筆者による以下の論文を参照されたい。『どよめきと噂』（『バルザック生誕200周年記念論文集』、日本バルザック研究会編著、駿河台出版社、1999年、pp. 373-387）。
- (4) *Lettres à Madame Hanska*, t. II, Édition du Delta, p. 523.
- (5) バルザックの『老嬢 *La Vieille Fille*』は1836年10月23日から11月にかけて『ラ・プレス』紙に初めて連載小説のかたちで掲載された。
- (6) 同じ手紙の中で彼はまた「我々がウージェーヌ・シューに負うところは大きい、彼は原稿料を引き上げてくれたのだから」と認めている。
- (7) *Sur Catherine de Médicis*, CH, t. XI, p. 168. (バルザック『人間喜劇』からの引用はすべて次の版から行い、引用箇所にはこの叢書の巻数をローマ数字で示し、その後にページ数を記す。*La Comédie humaine*, édition publiée sous la direction de P.-G. Castex, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1976)

-1981, t. I~XII.)

- (8) 本編において、作品の後に括弧に入れて示した数字は、作品が書物のかたちで初めて刊行された年を示すことにする。これらの年代はすべて **Stéphane Vachon**, *Les Travaux et les jours d'Honoré de Balzac. Chronologie de la création balzacienne*, Presse du CNRS, Presses Universitaires de Vincennes et de Montréal, 1992 による。
- (9) *Le Réquisitionnaire*, t. X, p. 1109.
- (10) *Ibid.*
- (11) ジャン・ノエル・カップフェレは T・シブタニの噂の定義に触れながら「噂は情報散乱のプロセスであると同時に、解釈と解説のプロセスでもある」と述べているが、バルザックはこの点に十分気づいていたと言えよう。Cf. **Jean-Noël Kapferer**, *Rumeurs, le plus vieux média du monde*, Seuil, 1987, p. 17.
- (12) **Franç Schuerewegen**, «Le lecteur et le lièvre – Comment lire *Le Réquisitionnaire* de Balzac?» in *La Lecture littéraire*, Actes du Colloque tenu à Reims du 14 au 16 juin 1984, Clancier-Guénaud, 1987, p. 50.
- (13) *Le Réquisitionnaire*, t. X, p. 1111.
- (14) *Ibid.*, p. 1120.
- (15) *Sarrasine*, t. VI, p. 1044.
- (16) **Roland Barthes**, *S/Z*, Seuil, collection «Essai», 1970, p. 34.
- (17) *Sarrasine*, t. VI, p. 1044.
- (18) **Michel Serre**, *L'Hermaphrodite, Sarrasine sculpteur*, Flamarrion, 1987, pp. 63–64.
- (19) *Sarrasine*, t. VI, p. 1049.
- (20) **Roland Barthes**, *S/Z*, *op. cit.*, p. 47.
- (21) *Madame Firmiani*, t. II, p. 147.
- (22) *Maitre Cornélius*, t. XI, p. 31.
- (23) *Ibid.*, p. 32.
- (24) この題のもとに書かれたバルザックの小説は、ゴドフロワという登場人物の目を通して、慈善活動家シャントリー夫人らの隠された過去を探り、王党派として彼女が連座した帝政時代の訴訟事件をめぐる真実を暴いた後、最終的には過去に敵対した人々の和解を語っている。